

ぼくと じしん

「あっ…… まただ。」

じしんが きました。しんど6の ^{おお}大きな じしんで、
とても こわかったです。

ぼくは、^こ子どもえんの ^{せんせい}先生の おはなしを きいて
ぜんいんで ^{こう}校ていに にげて、まとまって いました。

なん日か ^{にち}まえに、ひなんくんれんで とつぜん
^{さいれん}サイレンの ^{おと}音と ほうそうが なって ほんとうに
じしんが おきたら かくれたり、にげたり
できるように れんしゅうを しました。ぼくは、
その ことを おもいだしました。ひなんくんれんの ときは、
ほんとうの じしんじゃ ないので、ふつうに ひなん
できました。でも、こんどの じしんは、こわくて
しんじょうかも しれない。まもって くれる ばしょは
どこだろう。どこかに はしって にげるしか ない。
もっと つよくて 大きな じしんが きたら、こんどは
おうちも どうろも かいしゃとかも こわれて しまうかも
しれないよ。おじいちゃんとおばあちゃんとおとうさんと

おかあさんと おねえちゃんと いっしょに いる ときは、
こわがらずに がんばって いただけるけれど、

もしも ぼく ^{ひとり}一人で いる ときに、

ぐらっ、^{ぱりん}パリン、^{がちゃがちゃ}ガチャガチャに なって しまったら
どう しよう。とつても こわかったです。

しんさいから 6か^{げつ}月、こんど 大きな じしんが きた
ときは、^{ちか}近くに おかあさんとか となりの おばちゃんとかが
かならず いるから、きっと ^{だい}大じょうぶだよ。その とき、
ぼくは だれかの ところに いるように しよう。

そう おもったら こわく なくなつた。じしんが きても
うまく にげて、こえを だして げんきに して しようと
おもいます。

(作文宮城 60号 特別編『あの日の子どもたち』より)

